

## あなたの使命とは何か(18)「もっと強くなりたい」 メッセージノート(2023.4.2)

エペソ 3:14-17a <sup>14</sup> こういうわけで、私は膝をかがめて、<sup>15</sup> 天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。<sup>16</sup> どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。<sup>17</sup> 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。

### どうしたらもっと強くなれるのか？

#### 1. どこを見ているか？

- 問題に心を奪われてしまうのか、それとも問題の先にある希望を見据えて生きるのか？ cf. 望みや使命感があるかどうかで、人の苦難に対する対応は 180 度異なってくると『夜と霧』のヴィクトール・フランクルはいう。
    - a. 「こういうわけ」(14)とは、エペソ 2:22「あなたがたも(異邦人も)、このキリストにあって、どもに築き上げられ、御霊によって神のみ住まいとなるのです」という神の全人類救済計画を指す。
    - b. 異邦人に与えられている使命(神の国建設)とその計画遂行の一端を担う者としてパウロの自覚は、この牢獄生活に縛られることなく、精力的に活動が続ける(執筆活動や面会に訪れる人々を励ました)。
  - 「天と地にあるすべての家族の『家族』という呼び名の元である御父の前に祈る」(15)とパウロは、その心の向かう方向について説明を与える。
    - a. 「父」についてのイメージは各人が個人的経験から受け取ってきているが、ここでパウロが述べていることは、我々の類推からではない。全世界を完璧な形で創造し、その世界が墮落しようともケアし、支え続けるとともに、回復への道を用意し、着々とその方向へと導いている偉大にして信頼に足るリーダーである「父」という意味。
    - b. たとえ、そのような経験を持っていなくとも、心の奥には、そのような父が存在すべきだと認識している。
      - ・ 「神がいるならどうしてこんな悲惨なことが起こるのか？」という質問に対する船越先生の答えの中に、多くの人がこんなことを許し続けてはならないし、神がいるなら、このまま放っておくはずがないと考えるのは、神がいるのを前提にしているからだという指摘があった。ハンス・ケルゼン根本規範=ゾレン(当為:あるべきこと)。
- パウロは、この全世界の父である神との直接的意思疎通の術を持っていた。それが、祈りである。それは、私たちにも与えられている。あなたは今どこを見ているのか？問題を超越して、神の計画があることを信じているだろうか？

#### 2. 「内なる人」の強化

- まったく新しい筋肉である「内なる人」を使う

2コリント 4:16-18<sup>16</sup> ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。<sup>17</sup> 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたすのです。<sup>18</sup> 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

- a. 「内なる人」とは、神を信じることによって与えられる新しい永遠の命のこと
  - b. 「外なる人」の特徴は、「衰え」「一時の軽い苦難」「見えるもの」「一時的」
  - c. 「内なる人」の特徴は、「日々新たにされ」「比べものにならない」「思い永遠の栄光」「見えないもの」「永遠に続く」
- 復活の力によって力づけてもらう
- 「内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように」(16)。
- a. 私たちが、強くなるには、まず「聖霊」の力によるということをはっきりさせておく必要がある。これまでやってきたことにさらに時間と労力を傾注したとして無駄である。超自然的力との戦いだから。
  - b. 復活の力(デッサマイ)によって、強められよ(カタイオマイ)とダブルで強調されているように、与えられた人生を最後まで

生き抜くには、上よりの力が絶対に欠かせない。それ無しに1日も過ごすことはできない。

- c. 当然のことながら、「強めてくださる」は、受け身の継続形(アリスト)が使われており、日々、この神によって強めていただくという霊的トレーニングは意識的に続けていかなければならない。

- 成長はいつもプロセスであることを忘れない

ローマ7:22-23 <sup>22</sup> 新しい性質(「内なる人」)をいただいた私としては、神のご意思どおり行いたいのですが、<sup>23</sup> 心の中に潜む悪い性質には別の力があって、それが私の心に戦いをいとみます。そして、ついに私を打ち負かし、いまだに私のうちにある罪の奴隷にしてしまうのです。私は、心では喜んで神に従いたいと願いながら、実際には、相変わらず罪の奴隷となっています。これが私の実情なのです。

- a. 成長の過程で失敗はつきものである。最初からうまくいくはずがない。失敗の葛藤を繰り返す中で強められていく。それは、肉体の訓練でも同じ。

- b. では、失敗したらどうするのか? 「自分は救われていないのではないか?」という声が聞こえて来る時は?

ローマ7:25-8:2 <sup>25</sup> しかし、主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。キリストによって、私は解放されました。この方が自由の身にしてくださったのです。<sup>1</sup> こういうわけで、今は、キリスト・イエスに属する人が罪の宣告を受けることはありません。<sup>2</sup> なぜなら、いのちを与える御霊の力が、罪と死の悪循環から解放してくれたからです。

- ・ 自分に今自分は成長のプロセスの中にいるということを言い聞かせる。自分が救われたのは、神の一方的憐れみによったこと、そしてこれからの成長の歩みも、同じように神の憐れみによって進められていくことを覚える。
- ・ このプロセスは、一人で取り組むものではない。「あなたがたを強めてくださいますように」(16)とあるように、この訓練は、信頼できる共と一緒に歩んでいくものである。

### 3. 従順が鍵

「信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」(17)。

- 神を知的、感覚的に理解するだけでなく、従う(行動する)ことが大切

- a. 私たちの教育制度では、知的理解がそのゴールであるが、人生では、分かっているてもできないことをどう実行するかが問われる。信仰の世界でも同じである。いや、実践、生き方が問われるのが信仰(人生)である。
- b. 「心」(カゲイ)と訳された言葉は、「知」「情」「意」の座するところという意味を持った言葉で、聖書でこの言葉が出て来る時には、「意思」、すなわち神のみこころに従うのかということが問題となる言葉である。cf. Parsons: Action
- ヨハネ 14:23 イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。(新共同訳)

\* しかし、なかなか古い自我に縛られて、御心になう一歩を踏み出せないと感じている人がいるかもしれない

- 内住のキリストの存在(力の源泉)

- a. 「住わせる(カリオー)」と訳された言葉の時制(アリスト)は、一旦神が私たちの心に住み始めたら、決して出たり入ったりしないという意味になる。すなわち、私たちが主の赦しの愛を受け入れたならば、その後どんなことがあっても、主は私たちを去ること、見捨てることはない。
- b. この内住の主との親しい関係こそ、私たちの心の切なる願いである。私たちがありのまま(being)でいられる親友との交わりを通して私たちは、自分らしく生き始めることができる(使命の発見も含めて)。cf. ローマ12:1
- c. この内住のキリストがおられるのだから、この方と日々刻々どんなことでも話し合い従う時、平安と祝福が溢れる。

### まとめ

- あなたは、今どこを見ているでしょう? 問題か、神の計画か?
- 内なる人を強めていただくためにあなたが今できることは何でしょう?
- あなたが今、神に従うことに葛藤を覚えていることは何でしょうか?